

普段と違う味

一宮中・3 美崎 幹大

三日目の午後、東京ドームシティから東京駅へ向かうバスの中は、「あのアトラクションは楽しかったね。」とか、「ジェットコースターには二度と乗りたくない。」とか、楽しい会話が飛び交っていた。しかし、中にはこんな不穏な話もあった。「大雨で警報が出ている。」

「新幹線が止まっているみたい。」「もう一泊東京で過ごすかも。」十五分経ち、東京駅に到着した。もう雨は小降りではなくなっていて、濡れたアスファルトの臭いが蔓延していた。「新幹線の中で寝たいな。」「二十分位経ったら新幹線に乗り込んで……二時間くらいしたら愛知県かな。」そんなことを考えながら、名簿順の列で座り、濡れた靴下を乾かしながら待っていた。しかし、一時間待っても、二時間待っても、新しい動きがない。駅のアナウンスは、ずっと「大雨の影響で運転を見合わせています。」と繰り返している。先生たちの動きはせかせかしていて、焦っているような、気が立っているような、おかしな雰囲気漂っていた。

三時間と少し経った頃、先生がみんなの前で口を開いた。

「アナウンスの通り、新幹線が止まってしまっていて、復旧しそうにないです。そこで、品川プリンスホテルというところでもう一泊することに決まりました。一人一部屋となります。豪華なものではないですが、ご飯も必ず用意します。何回も言いますが、これは緊急事態です。どうかよろしくお願いします。」

大雨の中、東京駅から品川プリンスホテルまで、学年全員の大移動が始まった。山手線、品川駅行きの電車に乗り込む。全員が大きな荷物を持っているので、電車の中はとても窮屈だった。ちらっと見えた担任の先生のスマホには、「愛知県の修学旅行生、東京駅で足止め」というネットニュースが映っていた。

品川駅へ到着。ホテルに行くには、大きな横断歩道を一つ渡らなといけない。もう大降りとなっていた雨が、容赦なく顔や鞆を打ちつけた。信号が青になった瞬間、クラス全員が向こう側へ駆け出した。水溜まりを踏んだ気持ち悪さも気にならないほど、緊張した空気は感じていたが、「ドキュメンタリーのワンシーンみたいだな。」なんて、関係ないことを考えていた。

ずぶ濡れになりながら、ホテルのロビーに着いた。もう今日は雨に濡れることはない。そう思うと、今までの緊張から解放され、笑みがこぼれた。いつ自分の部屋に入れるだろうか。そう考えながら待つこと二十分、学年全員がロビーに集まることができた。先生が口を開いた。

「みんな、はぐれることなくついてきてくれてありがとう。今からの流れを説明します。一人一枚、部屋のカードキーを配ります。カップ麺だけど、夜ご飯も一人一つ準備できたので、順番に部屋に配りに行きます。自分の部屋に行ったら、まずは休憩してください。そのあとは、塗れた靴を乾かしたり、明日着る服を考えたりしてくれると嬉しいです。十時までには就寝してください。何回も言いますが、これは緊急事態です。不便だとは思いますが、どうかよろしくお願いします。」

無事、カードキーを受け取ることができたのだが、この「緊急事態」の一言で、緊張感が戻ってきてしまった。部屋に行くまでの道のりも、足元がふわふわして落ち着かなかった。

部屋に着き、やっと一息つくことができた。普段の僕なら「着る服なんて明日考えればいいし、湿った服も適当に鞆に突っ込めばいいか。」と考えるのだが、湿った服をハンガーにかけ、明日着る服を考え、濡れた靴には新聞紙を詰めておいた。一人でテレビを見るのも落ち着かない感じがしたので、いつか来るカップ麺に備えてポットのスイッチを入れ、シャワーを浴び、濡れていない体操服に着替えた。テレビをつけると、どのチャンネルにも「豊川市 大雨 緊

急安全確保」の文字が映っていた。

しばらくすると、担任の先生からカップ麺が配られた。先生は笑顔だったが、明らかに僕よりも疲れていた。何か声をかけようと思ったが、「大変ですね。」も、「がんばってください。」も違う気がして、結局無言で受け取ってしまった。

沸いたお湯をカップ麺に注ぎ、五分待ちきれずに三分で食べた。テレビには、知っている風景が水に覆われ、興奮しながら現地取材を続けるリポーターの映像が流れ続けていた。

その日、ニュースを見ながら食べたカップ麺は、普段と違う味でした。